

司馬遼太郎
全講演
[4]

1988(II) - 1991

朝日文庫

し ばりようた ろうせん こうえん
司馬遼太郎全講演 [4]
1988 (Ⅱ)-1991

朝日文庫

2003年12月30日 第1刷発行

著 者 司馬遼太郎

発 行 者 柴野次郎

発 行 所 朝日新聞社

〒104-8011 東京都中央区築地5-3-2

電話 03 (3545) 0131 (代表)

編集＝書籍編集部 販売＝出版販売部

振替 00190-0-155414

印刷製本 凸版印刷株式会社

©Midori Fukuda 2000

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

ISBN4-02-264322-6

司馬遼太郎全講演 [4]

江苏工业学院图书馆

1988(11) — 1999

藏 司馬遼太郎 书 章

本書は朝日新聞社より刊行された『司馬遼太郎
全講演 第2巻』（二〇〇〇年八月刊）中、一九
八八年十月～一九八九年の講演、および同『第
3巻』（二〇〇〇年九月刊）中、一九九〇年、
九一年の講演をまとめたものです。

目次

一九八八年 (II)

日本の言語教育 11

大隈重信が目指した文明 29

医学が変えた近代日本 43

一九八九年

オランダの刺激 65

「砂鉄のみち」と好奇心 87

ものを見る達人たち 100

司馬さんの控え室① 海音寺潮五郎さんへの思い

114

戦国から幕末の「防長二州」 116

一九九〇年

義務について 133

新島襄とザヴィエル 181

心と形 196

私のモンゴル語 241

鎌倉武士と北条政子 256

司馬さんの控え室② 正月と嶋中さん 272

一九九一年

秦氏の土木技術 277

踏み出しますか 291

司馬さんの控え室③ タイムの旅行者 321

ポンペ先生と弟子たち 323

宇和島の独創性 338

日本仏教に欠けていた愛 356

漱石の悲しみ 372

司馬さんの控え室④ 講演の後に文化功労者の記者会見 403

解説 貫いた「たけくらべ」の視点——田中直毅 405

司馬遼太郎全講演
[4]

1
9
8
8
(II)
|
1
9
9
1

一九八八年（昭和六十二年）
（II）

【一九八八年】

台湾の蔣経国総統死去、後任に李登輝副総統（二月）

韓国大統領に盧泰愚・民正党代表が就任（二月）

青函トンネル、瀬戸大橋が相次ぎ開通（三月―四月）

ソ連軍がモンゴルから一部撤兵開始（四月）

政治家への未公開株譲渡が続々発覚、リクルート事件拡大（七月）

イラン・イラク戦争が八年ぶりに停戦（八月）

ソウル・オリンピック開催（九月―十月）

【司馬遼太郎六五歳】

明治村賞受賞（七月）

『韃靼疾風録』により大佛次郎賞受賞（十月）

イギリス・オランダに取材旅行（十二月）

日本の言語教育

何度話しても枚方市役所ひらかたの人は熱心でして、聞いてくれません。数カ月間も、講演をするしないのやりとりが続きました、もうこれはしゃべったほうが早い（笑）。

ですから、今日はまだ何をしゃべっていいか、よく考えていません。

たまたま「ことば」について考えていますので、思い浮かぶことを脈絡なしに申し上げていきます。あとでなんとか皆さんの頭の中でまとめただけこうと、いま大変ずるいことを考えております。

私はこのごろよくテレビを見るようになりました。年を取って気が緩んだのかもしれませんが。若いころは、これでもまだ元気がよくて、ちゃんとしていたようです。たとえば東京オリンピックですが、ついにテレビで見なかったと思います。東京オリンピックは新聞で読んだ記憶があります。

今度はソウル・オリンピックをテレビで見ました。目で見ることのおもしろさを堪能したわけです。ですから、テレビの悪口を申し上げるつもりはないのですが、しかしテレビというものはつまらないものですね。

つまり、テレビの内容はすばらしいのですが、人間の頭の中の言語をだんだんだめにしていくのではないか。子供には害があるだろうな、というのが私の昔からの考えであります。

自分の体の中にある言語をどのようにして守って、どのようにして磨くかということが大事なのですが、その磨く方角を封じてしまうのがテレビの見すぎだということです。だいたい私は自分の作品がテレビ化されても、あまり見たことがありません。

筋は全部わかってますしね（笑）。

また、見たところで、不愉快になるかもしれない。その役者さんが不愉快なのではなくて、私が本来持っているイメージと違うということ、不愉快になるにちがいません。

そう思つて、なるべく見ないようにしてきたのですが、そのサボってきた報いを受けたこともあります。

ある年の正月、京都のホテルにありました。私の作品が一年間放送されたあとでして、ホテルのロビーで、

「私は何々でございました」

とあいさつされました。

「この人だれだっけ」

と思つてしまったのですが、それがテレビで主役を務めてくれた俳優さんでした。非常に間の悪いことになってしまい、

「ああ、テレビで拝見しております」

などと、いいかげんなことを言ったのですが、正直見たのは初めてでした。

それは役者、俳優への尊敬心とは別のことなのです。

私も男ですから、少年期もあり、思春期もあり、いつのまにか理想の女の人のイメージができあがりますね。

勝手に決めた理想の女性と一目でいいから会ってみたい、などと思つたりします。女の人は女の人で、いい感じだと思ふ男性がいるでしょう？

それをなんとか言葉の世界で表現してみようと思うのですが、その前に、京都には嵯峨野というところがありますね。竹藪のきれいなところですよ。

あれは、ほとんどが孟宗竹ですね。

太い竹です。大昔から日本にあつたものではありません。この枚方にけいたい継体天皇が来られたころの竹は、真竹まだけでした。豊臣秀吉が生きていたころも真竹でした。真竹の細い

たけのこ
 筍を日本人は食べていたわけですが、孟宗竹は江戸中期に中国の福建省あたりから入ってきたようですね。福建省から薩摩の国に入り、やがて京都のお百姓が嵯峨野で栽培を始める。

当たり前ですが、私の話は言葉の世界にあります。皆さんの頭の中にイメージがいくように、いろいろな情報を伝えようと思っけていまして、べつに京都のお百姓の話ばかりするつもりもないのですが、もう少し聞いてください。

京都は千年ほど都が置かれましたから、「都」という都市部の消費生活を賄うため、周囲の農村がそれぞれ専門の野菜作りをしておりました。

大根なら大根、ネギならネギ。大根とネギを一緒に作らないようですね。

たとえば桂では大根を作ります。大根の桂むきといえますね。桂は大根専門でした。聖護院しょうごいんも大根です。聖護院大根といまして、漬物にするとおいしい。いまの聖護院は街中にありますが、明治以前だと、あのあたりも郊外で畑が多かった。

幕末に新選組が駐屯していたのは、壬生みぶというところでして、ここでは壬生菜を作っています。独特の柔らかい野菜です。

賀茂川が流れるあたりには、下鴨神社と上賀茂神社かみがもという大きな社やしろがありますが、このあたりではナスを作っていますね。ナスといえば賀茂ナスにはかなわない。大きなナスで、それを味噌田楽にするとおいしいと考えた人もいます。

ちよつと余談で申し上げますと、大坂もそうですね。守口といえは大根ですし、門真かどまのあたりはレンコンだったりする。

難波はネギですね。高島屋のあるあたりは難波ですが、難波は水田のできないところでした。ですから難波に住むお百姓は畑百姓でして、大坂じゅうのネギの需要を引き受けました。

うどん屋さんに鴨南蛮がありますね。南蛮といえはスペイン、ポルトガルですが、そうではなくて、難波はネギの隠語です。八百屋さんや料理屋さんで符丁を使いますね。お客にじかにわかると、ありがたみが少ない。そこでナンバンといえは難波のことで、ネギのことなのです。

嵯峨野では孟宗竹の筍でした。

普通なら筍が出たら採って市場に出すだけでしょうが、ここのお百姓たちは、筍をいかにシェークリームのように柔らかくするかにかけていますな。

モミガラをたっぷり入れ、藁わらを入れ、馬糞を入れる。

何度もしているうちに、ふかふかの土壌ができあがり、筍はふかふかの中で育っています。柔らかい筍ができあがっていく。

こんな農業は世界のどこにもないでしょうね。農業を工芸のように考えてきた日本の都市近郊の農村があつて、なかでも京都の農村がそうであり、初めて嵯峨野の美しさが